# “元気の交換”ー東京の人たちがやって来たー

（特非）シビル NPO 連携プラットフォーム理事
大田 弘

私の故郷、富山県黒部市に都市部との交流を通じて過疎里山集落の活性化を目指して活動をしている会がある。（愛本ひばり野交流会 aihibarino.jimdo.com）

活動は３年目を迎えているが、地元での賛同者は多くはなく苦戦中である。昨年、20～30代を中心とした東京の男女 11 名が来所し、同会第一号 の交流会が実現した。東京人は江戸後期 に建てられた農村文化伝承館に宿泊し、釜戸での御飯炊きや“よもぎ”餅作り、野菜採りを体験。また、地元 ナチュラリスト の案 内により創建 1200 年以上とされる真言宗の古刹、江戸初期から後期に かけての 農地開拓事業、大正期からの水力発電事業 など の史跡を訪ねた。手作りの山菜料理は大好評を博した。

彼らからは「こちらが恐縮してしまうほどの歓待を受け、色々な知識とともに、配慮や思いやりについて多くを学びました」「良い人しかおらず、そのような方々と触れ合うことができ、心が洗われました」「とにかく楽しくて勉強になり、あっという間の２日間でした」などの感想が寄せられた。

東京人をどのように迎えたら良いのか？戸惑いと議論があった。集落の取り止めも無い日常の生活と風景が東京の人たちに感動を与え、逆に彼らから集落の良さを気付かせて貰ったという“元気の交換”となった。

東京への過剰な一極集中と地方の過疎化が社会問題化している。人が溢れる東京の人たちは「人のぬくもり」を求めている。彼らは集落への移住者にはならないものの、この体験を心に刻み、関係住民として村外応援団になって貰えると期待している。

戦後、一所懸命に働き、貧困を克服し、豊かさを手にした先に待っていたことはやはり「幸せとは？」だった。ノーベル賞を受賞したアインシュタインが大正時代に日本を訪れた時のこと。宿泊したホテルの雑用係にチップ（小銭）の代わりに一枚のメモを渡した。それには「穏やかでつつましい質素な生活は、成功を追求するせいで常に浮き足立っているよりも、より多くの幸福をもたらす」と書かれてあった。

これに過疎地活性化のヒントがあると思う。